

『ダーバヴィル家のテス』における 「差異」の問題

井 伊 順 彦

小説は社会変革等の理論に関する文献ではない。小説が第一に表現すべきは、主人公を中心とする作中人物の人物像や生き方である。例えば、愛憎に苦悩する、野心を抱く、挫折を経験する、こうした具体的な個人の様であって、「社会」という抽象的な存在の全体像ではない。後者を主題とした作品の主人公は、一般に人間としての喜怒哀楽に欠け、作者の創作意図の代弁者として主に「思想」を体現した存在でしかなく、読者の人間的な共感の対象にはなり難い。

だが言うまでもなく、小説が社会変革等の意図を生の形で出すべきでなくとも、小説家自身がそれを抱くのは何ら稀な事ではない。（ここで用いる「変革」には、狭義の政治性のみを含ませているわけではない。）その場合、作者は形而上次元の主題を念頭に置きつつ、あくまで主人公を前述の通りに生かす中で、その主題を扱わねばならない。故にこうした作品では、作者の意図する社会性が、結果として読者に示される事になるのが望ましい。

トマス・ハーディの『テス』は、その類の小説の典型例ではなかろうか。作者は主にテスの成長過程の具体的描写の中で、英國社会の既成道徳のみならず、その基であるキリスト教神学に対しても徹底的な見直しを行ない、結果として社会の存在原理を覆してみせた¹⁾。しかも一層重要なのは、『テス』が単にそれのみでなく、新たな原理創造に向けての示唆を読み取れる作品になっている事である。そこまでの「読み」は、恐らく作者自身の意図を越えてはいようが、偉大な作品に対してこそ可能なのである。

井 伊

テスの生涯は僅か20年余りであり、しかも描かれるのは最後の数年間のみだが、その間は余人の経験し難い波瀾の連続であった。彼女が直面した問題は3通りに分けられる。即ち貧困、社会の撻と自己の良心との矛盾、孤独、がそれであり、各々は様々な状況の中で様々な形で提起されている。しかも注意すべきは、これらが有機的関係にあり、いずれかの問題が無かったならテスの悲劇は防げたであろうに、という仮定は成立せぬ事である。3つの問題は19世紀後半の英國農村社会の時代状況と本質的に関連し、テスという人間に体現されているため、主人公が「テス」であり続けている限り、いずれは同様の運命が訪れていたに違いないのである²⁾。小論は以上の3つをそれぞれ物質、意識、存在における差異の問題と捉え、その順に考えてゆくが、特に最後の孤独の問題に重点を置く事にする。現代において、これは一層深刻な様相を呈していると言えるからである。

テスの死は「偶然」の重なりによるのではなく、「必然」の結果である。考証趣味を持つ一牧師から、己が貴族の末裔であるとテスの父親が聞いた事実から、アレク殺害の罪によるテスの処刑に至るまで、この小説は偶然の出来事に本質を左右されてはいない。冒頭での牧師と父親との遣り取りと同じく、その後の展開にも巧妙に伏線が敷かれてあり、厳密に文字を追うならば、テスの不幸自体に同情は禁じ得ずとも、運命の不条理を嘆する必要は無い。

少しくそれを検証してみよう。牧師から「サー・ジョン」と声をかけられた時、ジョンは何と応答したか。

'Now, sir, begging your pardon; we met last market-day on this road about this time, and I said "Good night", and you made reply "Good night, Sir John", as now.'

'I did,' said the parson.

'And once before that—near a month ago.'

'I may have.'³⁾

ジョンには既に“朗報”を得る複数の機会があったのだ。またこの地方には

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

同様に名門の末裔が少なからずおり、貴族の血筋など何ら実利には役立たぬと牧師は断わっている（p. 36）。それでもジョンは有頂点になり、酒場に出向いて酩酊する。これが物語の発端である。故に、この時もし牧師がジョンに話しかけなければテスの不幸の種は蒔かれなかった、とは考えられない。また、ジョンを酒に酔わせたのはダーバヴィル家の血筋それ自体ではなく、彼自身の意識という事になる。この意識が、貧困という一家の状況と深く関連しているのである。ドストエフスキイの『罪と罰』において、ある人物がラスコーリニコフにこう語っている。

貧は悪徳ならずというのは、真理ですなあ。（中略）ところで、洗うがごとき赤貧となるとね、書生さん、洗うがごとき赤貧となると——これは不徳ですな。貧乏のうちは、持って生れた感情の高潔さというものを保っておられるが、素寒貧となると、誰だってそは行きません⁴⁾。

だが「貧」と「赤貧」との間に、明確な一線など引き得るであろうか。つまり「素寒貧」故に卑屈になるか否かは、大きく当事者の意識にかかるのではないか。ジョン一家の貧困と彼の意識とが深く関連していると述べた所以である。

さらに、彼が夜中に起きて仕事に向かえぬ程に酔ったのは、少量の酒にも負ける「体質の脆弱（p. 56）」のためであり、テスが代理を買って出たのは、自尊心の強い彼女（p. 42）には、他人に恥ずべき事情を話して代理を頼むのが耐え難かったからである（p. 57）。この様に筋の展開は論理的な説明が可能なのである。

だがここで一つ、ハーディに対する誤解の元の一つともなりそうな場面を挙げよう。馬のプリンスが郵便馬車と衝突して死んだ一件である。この原因はいかにもテスの不注意に違いない。彼女は馬上で居眠りをし、馬が道路の逆方向を進むのに気づかず、故に一家は貴重な財産を失ない一層の貧困に陥る。この設定は、なるほどハーディ得意の「偶然」の手法と考えられて無理は無い。だがテスに対するこの“神々の司による戯れ”さえ、作品の本質を左右するに

井 伊

は至っていない。何故なら、プリンスの死における最大の問題は、その死に方ではなく死それ自体の意味だからである。死体を前にして、テスは責任を誰にも転嫁しなかった。腑甲斐無い父親も、結果的には自分を仕事に行かせた母親も、何ら恨む事なく彼女は自らを責め、「母さんと父さんはこれから何を頼りに生きていくんだろう（p. 61）」と、まず家族の今後を心配している。このテスとジョンとを比較するなら、人間の意識に与える貧困の影響が相対的に過ぎぬ事がわかるが、とまれテスの上記の一言が何を意味するかは明白ではないか。この時に限らず、プリンスの命が如何なる形によってであれ失なわれた場合には、家族想いの長女で、強い自尊心ゆえに一家の恥を晒して他人に援助を請うなど断固認めぬテスは、家族を救うべく自己犠牲を敢えてしたに違いないのである。またプリンスは既に「老衰（p. 62）」であった。従ってテスが「行動」を起こす事自体は、既に時間の問題であったのだ。

ではテスを他ならぬアレクの家へ向かわせた要因は何か。ここからが本題である。それは両家が“血縁”関係にあるという偶然事ではない。自責の念にかられたテス自身の決断もさる事ながら、第一には、長女を玉の輿に乗らせて、一家の窮状脱出を図らんとした母親の強い要望である。両親のうち、終始この一件に関して主導権を取っていたのは、血筋への空虚な誇りに酔うばかりの父親ではなく、豪家の“親類”にだからこそ娘を行かせんとした母親であり、この点に注目すべきではないか。彼女は自らの家庭とアレクの家庭との貧富の「差」を問題にし、それを埋めるべくして彼女なりの行動に出たのである。それまでの彼女には、一家の貧困の意味を深く考えた事はなかったであろう。マーロットという一共同体内の人々の生活程度は大同小異であり、貧しいが故に何らかの深刻な不利益を被った経験など、彼女は持っていたに違いない。生活が苦しい事は無論わかっていたろうが、それは主として自らの実感つまり絶対的感覚に基づいていた。しかし今ダーバヴィル家という存在、即ち比較すべき他者を知った。そこで“同じ血筋”でありながら、即ち自らと同一次元の存在でありながら、生活程度が大きく異なる家庭に接近を図ったのである。詳細は後述するが、人が孤独の状態を脱するためには、まず自己と他者との相違

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

を認め、その上で対等な人間関係に向けて相互理解を図らねばならない。つまり、まずは自他の「差異」に存在価値を認めねばならない。それはしかし、両者の間に越え難い壁を築く事を意味しない。差異の否定は自他の同質化を求める姿勢の表われであろうが、むしろそれこそは近代化の流れに反する。近代化は自他の差異を認めるのが前提だからである。共同体内の同質性しか知らなかつたテスの母親が、同一次元に他者の存在を意識したのは、その意味で近代化の時の流れを示している。だが惜しいかな、彼女の意識自体は時流よりも遙かに遅れていた⁵⁾。故にその行動を誤り、それがテスの不幸と結びついているのである。

この他にも貧困の問題は、全編に亘り本質的な要素となっている。テスがアレクの家を逃げ出した際、追いついた彼は物質の餌をちらつかせて彼女の翻意を促す（p. 112）。また物語の最後でテスが結局アレクを受け入れたのは、父親の死によって土地を追われた一家の生活のためであった。こうした意味でジョン・ルーカスの言う通り、「テスに対してアレクの行使している力は物質的」であり、性的な力は実は彼らの関係のわずかな部分を占めるに過ぎない⁶⁾。

テスの直面する問題の第二、即ち社会の撻と良心との矛盾に移ろう。この点でもテスは「差異」に苦しめられている。

この小説は彼女の精神的成长の記録と言えよう⁷⁾。無学な母親の世代とは異なり正式な教育を受けているとはいえ、当初の彼女は特に問題意識など持たぬ平凡な少女であった。しかしアレクの許から自宅へ戻る途中で、聖書の一句‘THY, DAMNATION, SLUMBERETH, NOT’を見た事に始まり、子供を出産し、その洗礼や埋葬まで自らの手で行なわざるを得ぬ一連の展開において、良心に恥じぬ行動が実は社会通念には合わぬ事を思い知らされ、不安と動搖とを経験する中でエンジェルに出合い、彼から近代的懷疑精神を学んでゆく。この精神を持つのは自らへの自信の欠如を示すのではない。懷疑するには、思考の中心に自我を置かねばならない。それはむしろ自らへの自信の表現と言えよう。ところが「自我」という存在の不完全を知る人間は、全能の神の御力を絶対的に信ずる場合とは異なり、不安と無縁ではいられない。そして自信と不安とが交錯する中で、自らを他者の目で見つめる事、即ち対象に対する相

井 伊

反する2つの見解を同時に考慮に入れる事を忘れず、その上で己が立場を決めねばならない。結局その決定は自己の信念によるのであり、しかもそれに従つて行動せねばならぬ筈だが、人は多くの場合、社会通念や因習の力に屈してしまってはいけない。ところがテスは違った。彼女が子供の洗礼を行なった場面で、ハーディはこう書いている。

The calmness which had possessed Tess since the christening remained with her in the infant's loss. In the daylight, indeed, she felt her terrors about his soul to have been somewhat exaggerated; whether well founded or not she had no uneasiness now, reasoning that if Providence would not ratify such an act of approximation she, for one, did not value the kind of heaven lost by the irregularity —either for herself or for her child.⁸⁾

この時すでに子供は死に瀕していた。「この世に生まれて来る事で社会に対して罪を犯している（p. 128）」我が子を、しかしテスは必死で生かさんとする。社会の掟を破っているという意識を持たぬわけではない。が、我が子の状態は「社会の法を知らぬ彼女の本能的側面（p. 128）」を刺激した。そして、彼女は社会の掟と自らの良心との「差」を意識し、尚且つ後者の命に従うのである。この様にしてテスは近代人への道を歩み始める。無論まだ当時は懷疑精神の何たるかを体系的に学んではいない。それにはエンジェルという教師との出会いを待たねばならぬが、既にテスは自らの実感によってその原型を会得していたと言える。

だが無論、ハーディは掟破りを許しているわけではなく、まして促してなどいない。アレクを殺したテスの罪を見逃しておらぬ事が何よりその証である。また、前に戻るが「強いられて（p. 121）」ではあれアレクと罪の日々を送り、聖書の教えに反した事に、テスは動搖せざるを得ない。しかしあくまでも、自ら招いたわけではない罪をも聖書は咎めるのかと、そう自問しているのであり、これが重要なのである。テスの過去の告白を聞いたエンジェルは、実は日頃の

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

信条に合わぬ保守的な意識から解放されておらず、妻を許せずに周知の通りの行動に出るが、後には物の見方を変えて彼女の許に戻る。この両者に共通するのは、現実の衝撃を受け一時は混乱しつつも、結局は道徳における本質性と擬制性との「差」に気づき、しかも信念に従って擬制の道徳を捨てている点である。

有形無形の圧力に満ちた現実社会を生きる中で、自己の良心の命に従い続ける事は苦しい。知らぬ内に、あるいは自ら進んで、既成の掟に身を委ねて、自他の差に気づかぬか敢えて目を背けるかする例の何と多い事か。ハーディは人々のそうした態度を何とか変えんと筆を取った⁹⁾。人がまずすべきは、何より現実の厳しさを認識する事ではないか、そうハーディは考えた。『テス』においても、社会の進歩によってこそ人間的問題は解決されようと考える楽観主義に疑問を提し（p.72）、教育の力に期待しながらも、現状ではそれはまだ人間を変えるまでには至っていない、との認識を示している（p. 206）¹⁰⁾。また、テスはエンジェルの再三の求婚を拒み続けたが、それは何故であったか。「精神が片寄っていない時に良心が決めた事を、今さら覆えしてはならない（p.216）」と考えたからである。だがその「片寄っていない」見方自体、実は世間の偏見に基づいているのではあるまいか。テスはそこに気づいていない。だがハーディは気づいている。それ故テスを成長させる事ができたのだが、人間の心理と社会の因習との力関係が、社会進歩によって容易に逆転し得るものでない事をも彼は教えている。

また一方ハーディは、周知の通り悲観主義者と評される事にも強く反発している¹¹⁾。彼の「悲観」主義は、運命の力に対する人間の無力を嘆ぐ事ではなく、如何なる事態に置かれてもその現実から逃げず、「最悪の事態を直視¹²⁾」する事である。この姿勢が『テス』において表われている箇所を見てみよう。酒場で泥酔した父を抱えて、テスが母や弟のアブラハムと帰宅する場面である。

The two women valiantly disguised these forced excursions and countermarches as well as they could from Durbeyfield their cause,

and from Abraham, and from themselves;………¹³⁾

無理からぬ事とはいえ、テスにして当時は現状打開に何らなす術無く、現実に押し流されていた。足元もおぼつかぬ父親を抱えているために、彼らがまっすぐには家路に向かえぬ様が描かれている場面だが、母親は固より現状の源の所在など考えない。まだジョンとは恋人同士であった頃、彼女は「彼の性格上の欠点には目をつぶり、恋人としての理想的な面からのみ彼を見た (p. 50)」のだが、結婚した後に夫の欠点が露わになっても、自らの軽率を自省する事はない。こうした彼らの生き方が、一家の悲惨の一要因であるのは疑いない。

ハーディはテスに対して、それでも極めて強い愛情を抱いていた。その感情はほとんど恋人への想いであった¹⁴⁾。よく見られる例だが、作者が主人公と一体化してしまい、あたかも自らが動くが如くに主人公を動かす危険すらあったとも言えよう。が、彼の場合は決して健気な主人公への愛で己を見失う事はなかった。いかに立派な人格の持ち主だとはいえ、テスは何より欠点も備えた「人間」として描かれ、時には作者の目には批判すべき対象ともなった。一例を挙げよう。アレクの家から逃げ帰った後、母親になったテスは近所の人々と働く様になる。彼らに悪意は無いのだが、やはり世間の目を意識する彼女は、次第に人目を避ける様になる。昼間は家に籠り、暗くなると外に出る。そうしていわば社会を避ける彼女の安息の場は、森の中すなわち自然である。生きる事の苦しさを忘れ、自らが自然と一体になったかの如く感じる (p. 120) この時、しかしテスは誤った見方をしているのではないか。即ち自然と社会とを対立概念と考え、自らを自然の側に置き、漠然と社会を敵視しているのである。ハーディはそれを承知しており、穏やかな表現ながらテスを批判している。

But this encompassment of her own characterization, based on shreds of convention, peopled by phantoms and voices antipathetic to her, was a sorry and mistaken creation of Tess's fancy-a cloud of moral hobgoblins by which she was terrified without reason. It was they that were out of harmony with the actual world, not she.¹⁵⁾

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

先のテスの母親や「大人」になる以前のテス自身の件でも明らかに通り、意識の変革は容易ならぬ業である。この時点のテスには、自然とて実は味方でない事がわからない。その「馴染の環境は、彼女の悲しみ故に気持ちを暗くする事も、苦しみ故に胸を痛める事もなかった(p. 127)」のだが。自然は常に人間の生き方を冷徹に見つめるのみである。ハーディが英國社会の屋台骨に対しても追求の手を緩めなかつたのは、つまりは人間の能力への過信盲信を拒否したからである。さらに、歴史を固定的に捉えず、凡ての存在・概念についてその正当性を厳しく見直すべきだと考え、それがキリスト教神学にまで行き着いたからである。といって彼が人間不信に陥っていたわけでは全くない。自らも含めて人が独善的意識を抱く事を戒め、人間に対して強い共感を寄せると同時に、厳しい批判精神を忘れててもいなかつたからに他ならない。つまり彼には凡てが流動的な存在であった。その中で唯一不変の姿を保つのが自然だったのである。故に自然是人間の感情に左右されはしない¹⁶⁾。トールボセーズ農場時代の友人マリアンの誘いで、不毛の地フリントコム・アッシュへ向かうテスに対する時の、「正直で、あからさまで、公平な自然の敵意(p. 326)」は、実は誰に対しても向けられている。然るに人は往々にして己が心理状態を自然に投影し、先に挙げたテスの如き態度を取りがちになる¹⁷⁾。だがとまれ「人間の感情に左右され」ぬ冷厳は、逆に言うなら常に本質を変えぬ存在たる証であって、社会に生きて流動的価値観しか抱けぬ人々が、時に自然を安息の場とするのは当然であろう。エンジェルはトールボセーズで戸外の生活を始めて以来、「『神の御力』に対する信仰の衰えと共に文明人を捉えている慢性の憂うつ症から、見事に立ち直った(p. 156)」が、これは自然が果たすべき役割を示した典型例である。だが、作中の北極星的存在として不可欠であるのは無論だが、自然是ハーディ文学にあってはあくまで「従」であり、「主」は人間である。ジョージ・ウォットンの言う通り、自然が意味を持つのは「人間との関係においてのみ¹⁸⁾」である。その意味で自然を味方の如くに錯覚し、一時的にせよ現実と幻想とを混同したテスは、ハーディの批判を受けて当然であった。これは即ち、作者が主人公との間に距離を取る事を忘れず、テスを単なる自らの思想の代弁

者としておらぬ事を示している。

エンジェルを知って以来のテスの成長ぶりが最も鮮明なのは、アレクとの“神学論争”の場面においてであろう。低教会派の誠実な牧師であるエンジェルの父の影響で、アレクはそれまでの放蕩生活を改め、逆に過激なまでの説教者となり、その後テスを見かける。その直後から彼の前非を悔いての復縁攻勢が始まるのだが、テスはアレクのあまりの変化、その極端なキリスト教思想に紛い物の匂いを嗅ぎつけ、また固よりエンジェル以外の男に愛を感じるなど思いもよらぬ故、彼の要求を撓ねつける。その際テスが神の力を否定した(p. 368)ため、両者の間で短い口論が始まる。テスの信仰心の欠如を難ずるアレクに対し、彼女は答える。「山上の垂訓の精神は信じています。主人もそうでした。でも私が信じないのは——(p. 368)」具体的に何が否定されているのかは描かれていない。これは恐らく作者が世の反発を考慮しての事ではないか。が、ともかくテスは「神学と道徳」とを区別し、「如何なる教義とも無縁の倫理体系(p. 377)」のみを信ずると明言した。制度としてのキリスト教を否定したのである。言い代えれば、「道徳」「moral」という言葉の2重構造に気づき、その本質的意味が現実にはどれほど歪められ、現体制の維持のために都合良く解釈されているか、それを述べたのである。この意味は極めて大きい。何故なら、『テス』以前にも「新しい女」を描いた作品は少なくなかったが¹⁹⁾、『テス』はどの作品にも増して、社会の支配原理について徹底した考察をしているからである。

第三の問題点に移ろう。小論が最も重視する問題、即ちテスは如何なる存在であったかについてである。家庭の内と外とでは、彼女は違った話し方をしていた。つまり話し相手に教育があるか否かに応じて言葉の2本立てをしていた(p. 48)。「ロンドンで訓練を受けた女教師の下で、国民学校で6年を過ごした(p. 48)」テスは、故に共同体内の他成員とは既に異なる視点を持っていたと言える。無論これが即ち彼女の孤立を意味するわけではない。しかし後に村の中で「余所者、異邦人(p. 124)」として生活せざるを得ぬ伏線ではあり得よう。また、その特異の視点は、思わぬ場面でも彼女の存在を他から切り離し

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

ている。作品の冒頭付近に、五月祭を祝う村の少女達が踊っている場面がある。そこへ2人の兄と共にエンジェルが通りかかり、暫し踊りに加わる。だがテスの存在に気づかなかった彼は別の少女を相手役に選んだ。テスは落胆するのだが、それは何故であったか。村の若者は「あの見知らぬ若い男の様な上品な話し方をしない (p. 46)」ため、つまりエンジェルの洗練された言葉遣いに彼女が魅かれたためである。だが言葉遣いに魅力を感じ得るには、それだけの知性を必要としよう。故に当時のテスは特に問題意識に目覚めてはおらずとも、後にエンジェルの教えを受け入れる下地を備えていた事がわかる。逆に言えば、それは共同体にはそぐわぬ存在になる要因であり得る。エンジェルは踊りの場から立ち去らんとした時、初めてテスに目を止め、その「かわいい娘」‘the pretty maiden (p. 45)’と踊らなかった事を後悔する。しかし2人は言葉をかわさぬまま別れる。この場面で興味深いのは、互いに対する後の2人の愛しが暗示されている点である。恋人同士になってからも、テスはエンジェルに「知性」の具現を見、エンジェルはテスに「女」の具現を見、共に互いの「人間」を理解しようとしなかった。ロイ・モレルの指摘通り、ハーディの描く人物の苦悩の源は、しばしば「孤独、誤解、意志疎通の欠如²⁰⁾」であり、これはまさしく彼らの関係の事情を説明している。

人が孤独感するのは、自己と他者との相違を意識せざるを得ぬからだが、その意識はまず自我に目覚めぬ事には生まれ得ない。その自意識を持つには一定の年齢に達する必要があるが、これ自体は人により千差万別であり、教育水準の如何とも直接には無関係であろう。故に人は凡て自他の違いを認識し得る可能性を持つ。しかし、常に同質性の社会の枠内におり、同一の言語を用い、外部から異質の刺激を受けぬままであれば、ついに「差異」の感覚を知らぬ事なく終わってしまう。即ち孤独を感じる経験を持たぬわけであり、近代人の特質たる懷疑精神とも無縁という事になる。何故なら懷疑精神とは、神を含めてあらゆる存在と自己との間に距離を置く、即ち「差異」を感じる精神だからである。が、この定義のみでは十分でない。その差異を同一次元の世界において感じられねば、懷疑している事にはならない。ハーディ文学の農民達は、しば

井 伊

しばキリスト教の信仰とは無縁の存在であり、神に対する冒瀆的言辞をさえ弄する場合がままあるが、それは懷疑精神とは無関係である。と言うのも、彼らとキリスト教の神とは互いに異次元に属しており、彼らが生活の中でその存在の有無を考え、それ故に苦悩を余儀無くされる事などあり得ぬからである。つまり彼らは神を恐れる必要を認めぬと言うより、神を他者として意識する機会自体持たぬのである。しかも同一の方言を用い、同程度の水準の生活を営んでいる。それゆえ孤独の意味を深く追求する経験を持たず、その必要もない事になる。

ところがテスは違った。「ロンドンで訓練を受けた」女教師、即ち共同体とは異質な存在から教育を受け、既に自他の懸隔の何たるかを知らされ、同質世界での自己の特異性を考える素地を得ていた。だがこれはあくまで素地に過ぎない。差異が意識されるのは、差異が意味を持って初めての事である。例を挙げよう。仮に共同体内の全成員が当初から互いに異なる言語を話し、誰一人として意志伝達ができぬ場合、自らの特異性を痛切に感じて孤独に陥るなどあり得ようか。この場合、世界は己一人から成り立っており、比較すべき他者の存在が同一次元に求められぬ以上、世界は「自己」という同質性に染められた空間になる。完全なる相違は完全なる一致と表裏の関係にあり、人は自他の差に意味など認め様もない。だがそれでも、人は社会生活を営む上で他者との意志疎通を図らぬわけにゆかない。故に異次元の存在同士の場合とて、必ずやそのための何らかの手段が講じられるであろう。そうして彼らは次第に同一次元において共存する様になる。しかしそれによって、逆に彼らは否応無く自他の相違を意識せざるを得なくなる。即ち存在空間が接近すればする程、自他の差異が大きく意味を持つ様になる。そこで彼らはその意味に深く想いを致さねばならない。いわゆる近代化は、この様な逆説的過程を言うのではないか。

エンジェルとテスの場合にこの過程を当て嵌めてみよう。彼らが結婚式をあげた晩、過去の傷の告白を先にしたのはエンジェルであった。彼はロンドンで壳笑婦と過ごした48時間の経験を語り、罪の許しを妻に請うた。妻は直ぐさま許した。何故か。「もうこれで2人はお合いこ (p. 234)」になったと思った

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

からである。テスは自らの過去を今日まで打ち明けられずに来た。と言うより結婚自体に気が進まなかった。エンジェルを人生の教師と崇め、完璧な人格者と見做していた故、自他の間の落差を越え難い壁の如くに感じていたからである。即ち、テスにとってエンジェルは異次元の存在であり、さらに両者の立場は上下関係にあった。テスはエンジェルの魂を聖者の魂、知性を予言者の知性と信じている（p. 234）。その関係に対するテスの劣等意識は、長い間のエンジェルの熱烈な求婚によっても消えなかつた。しかし結局は彼の愛に押し切られて、彼女は結婚に同意する。無論、「凡ての人間に染み渡っている歓びへの欲求（p. 232）」にも動かされたのだが。それでも、エンジェルと共に土俵に上れる事以上の歓びが、テスにあろうはずはない。そこで彼女は夫の告白を聞いた後、進んで自らの過去を話したのである。ところが事実は違つた。期待通り「2人はお合いこ」にはならなかつた。何故か。エンジェルにとっては、2人の同じ過去が同じではなかつたのだ。社会通念に縛られたその意識ゆえに、善意とはいえ、彼は異性を同等の存在とは見ていなかつた（p. 260）。テスをトールボセーズで初めて見た時の彼の印象は、「初々しく汚れ無い自然の娘（p. 158）」であった。この印象は2人の関係が深まっても維持される。つまりエンジェルは、テスを結婚式まで共通の土俵には上げていなかつた。彼にとって結婚とは、異次元の存在を、その異次元性を失わせずに同一次元に呼び込む行為であったと言えよう。「自然の娘」は現実に生きる人間ではない。ところがテスには過去があった。彼女が人間である事をエンジェルは知らされたのである。こうして両者は同一次元に置かれた。が、皮肉な事に、それによって夫の目には妻が過去の傷を持つ他者として映り、自他の差異が俄に意味を持ち始めた。この他者の存在を彼は許せなかつた。差異を認め、尚且つ相手を尊重するという態度を取れずに終わったエンジェルは、故にこの時、主観的にはどうであれついに近代人たり得なかつた。

夫に去られたテスは本質的な意味で孤独になった。「自分以外の誰にとっても、彼女は存在でも経験でも情熱でも感覚を有する構造物でもない（p. 127）」い事を、肌で感じさせられた。だが逆に言えば、この時こそ自らの存在の意味

井 伊

を深く考え、社会で他者と共に存するとは如何なる意味を持つのかを追求し、自他の差異の存在価値を認めて尚且つ連帶を図る機会なのではないか。つまり自律的諸個人の結び付きによる社会形成は、逆説的に、まず個人が孤独に陥る経験を持って初めて初めて可能なのではないか。

エンジェルと別居して一年近くたったある日、テスは森の中を歩き、社会という流動性の世界に身を置く疲れを癒して、次の様に悟るのである。

She was ashamed of herself for her gloom of the night, based on nothing more tangible than a sense of condemnation under an arbitrary law of society which had no foundation in Nature.²¹⁾

こう悟る事によってテスは底を脱し、他者への働きかけを行なう準備を整えたと言える。再び自然の中で彼女は英気を養ったのだ。

人は不变の価値基準なしでも生きる事ができよう。だが良く生きる事はできるか。神がその地位を追わされて以来、西洋には大きな混乱と無秩序が生まれ、彼の地の人々は、現状に対する不安と未来に対する悲観とを経験せねばならなかつた。その責任は、他でもない、人間自身に帰せられるのだが、しかしそうした事態はまた歴史の不可避的流れの結果でもあった。常に歴史は動き、人間に行動を促す。人間はそれに応えて不可侵の神殿にまで追求の手を緩めない。全ての問題を人間の問題と捉え、それゆえ我に關せざるは無しとてその本質を暴いてきた。だが果実の皮を剥ぎ実を取り出す作業は、いつかは芯に到達し得るとの確信を持たずに行えるものか。その確信を人に与える存在が不变の価値基準に他ならない。また、時に人は作業の手を休めて、英気を養わねばならない。テスに関して述べた通り、ハーディ文学の自然はその休息の場である。行動の指針ではないが、その再活性化剤であり、やはり人間には不可欠であったに違いない。生きるとは究極的には行動する事だからである。ではハーディにおける不变の価値基準は何であったか。それは後述する事にしよう。

この後テスはフリントコム・アッシュに向かう。言い寄る男達から身を守る

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

ため自ら眉毛を切り、外見にも心を配らず見窄らしい格好で一人ひたすら歩く。何故テスは自らを殊更に貶めるかの如き様子を見せるのか。先に自律的諸個人の結び付きについて触れたが、そのための他者への働きかけには何が必要であろうか。自己の本質を他者に伝え、他者の本質を捉え、両者間の差異を認め、尚且つ両者の存在が互いにとって必要である事実を理解する事である。テスが外見と内実との間を斬程に広げたのは、敢えてそうして自己の内に差異を設け、その差異に気づき彼女の本質を見極め得る者を求めての事である。即ちこれは他者への働きかけの表現であり、精神的成长の証ともなっていよう。ジョン・ルーカスによれば、ハーディは『テス』においてこそ、自己の本質からの分離や存在証明の否定の意味を最も力を込めて探求しているという²²⁾。その探求の姿勢は、正にこの場面に象徴されてはおるまい。

一方その間にエンジェルも成長を見せた。ブラジルへ去った後に出会った一人の英国人の ‘cosmopolitan mind (p. 389)’ に接して、彼は自らの狭量を恥じ、妻の事情を理解でき得るまでになる。ここで彼の心境が如何に変化したかを考えよう。それは単に彼自身の成長の過程や、彼ら夫婦個人の対等な人間関係成立の要因を示すのみではない。近代以降において人が人格を相互に認め合い、その輪を広げて一つの社会を造るには、如何なる世界観人生観が基本的には必要か。また、逆にそれを持つ事が社会にどの様な影響を結果的に与えるか、そうした点を明らかにするであろう。

ハーディは主に男女関係の理想的在り方を摸索する事で、理想的な人間関係の成立には何が必要かを考えた。だが何故「男女」なのか。同性同士の場合とは決定的に異なり、そこには原初的に差異が存するからである。女には通常、男と同一の社会的基準が適用されない。この男女の差を固定的に捉え、本質的な存在と見做すか、または固定観念をでき得る限り排して問題を追求する姿勢を、この点においても貫くか。ハーディは後者の立場を取った。男女関係にこそ人間的問題の典型が見られると考えたのである。繰り返すが、近代精神は同一次元で自他の差異を意識する事に始まる。だがその段階で思考を停止し、両者間の溝に如何に対応してゆくかを考えねば進歩はない。『テス』の主題は個

井 伊

人的関係の水準でその段階を乗り越える事にあった。しかしこの作品には、単に男女の不平等や女性の自覚についての問題提起のみならず、作者の意図を恐らくは越えて、一層重要な問題を読み取る事ができるのである。即ち、一体「自明の理」の「自明」を疑う姿勢は、結果として社会を如何に変え得るのか。

エンジェルに戻ろう。ブラジルで彼はどう変わったか。一口には、物の見方を革命的に変えたと言えよう。前述の 'cosmopolitan mind' の影響で、自らの固定観念が普遍的恒久的に正しいわけでは全くない事を悟った。

Having long discredited the old systems of mysticism, he now began to discredit the old appraisements of morality. He thought they wanted readjusting. Who was the moral man? Still more pertinently, who was the moral woman?²³⁾

世に言う「一般的」「普遍的」「公平中立」な価値基準は、一体、誰にとってそうなのか。「男」 'man' が「人間」 'man' と同義である社会において、「公平な」見方とは一体いかなる見方か。誰にとって「公平」なのか。エンジェルの疑問を別言すればこうなるに違いない。エンジェルは自らが「男」であった事に気づいたのである。これが何より最大の変化であった。通常「人間的」と称せられる存在は、実は「男性的」に過ぎぬのであり、男は無論の事、女もそれに気づかずにいる。そうしてその基準に自らを合わせんとする。つまりは男の目から正しいと判断される事を望み、自らの意志を押し殺すか、それが誤っていると思い込む。前記ウォットン言うところのこの「知覚の構造²⁴⁾」の中で、男はその様な女を「道徳的」と称しているのではないか。この点にエンジェルは気づいた。その意味で、自らの「個」性を意識する事が連帯への第一歩であったのと同じく、自らの「男」性を意識する事こそが、「人間」に近く第一歩に他ならない。この逆説的真理を把握して初めて、即ち 'man' と 'man' との差異を認識して初めて、エンジェルはテスを同一次元の存在として認め得たのである。

既に触れた通り、アレクとの論争時に、テスは「道徳」 'moral' という語

『ダーバヴィル家のテス』における「差異」の問題

の内の差異を指摘している。男女の立場の相違はあれ、彼らは共に同じ問題意識を持つに至った。ロイ・モレルの言う通り、ハーディの芸術の真髓は体制の教義への無批判な追随ではなく、「真の探求であり『問い合わせ』の連続であった²⁵⁾」。ハーディは常に固定観念を極力排し、あらゆる存在への問い合わせをやめなかつた。そしてキリスト教の枠を超えた普遍的道徳の存在を追求したのである。彼にとってはその道徳こそが不変の価値基準と言えたのではなかろうか。

注

『テス』のテクストには、The New Wessex Edition (Macmillan, 1974) のペーパー・バックを使用した。邦訳は筆者の手による。

- 1) その意味ではデズモンド・ホーキンズの言う通り、「ハーディの足はウェセックスの土地に根付き、彼の視野は遙かにそれを越えて広がっている」(Desmond Hawkin, *Thomas Hardy*, p.19, Arthur Barker, 1950)。しかしホーキンズは、ハーディの主題を「人間と敵意ある宇宙との叙事詩的対決 (p.44)」と見ている。小論ではこうした運命論的立場を取らない。根拠は本文参照。
- 2) 「『テス』の主題は英國小作人階級の衰亡である」とはアーノルド・ケトルの有名な規定だが (Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel* 2, p.45, Hutchinson, 1981), 小論で言うテスの死の必然性の意味は少しく異なる。つまりテスは都市化の波による農村の解体の象徴ではなく、我々現代人の先駆者であり、我々が未だ解決しておらぬ問題と格闘し、解答を得られぬまま命を失なったと私は考える。即ち彼女は負の象徴ではなく、正の象徴である。
- 3) *Tess*, p.34.
- 4) ドストエフスキイ『罪と罰』(上) 米川正夫訳 新潮文庫 20頁。
- 5) よく引かれる通り、テスと母親との意識には200年の差があり、「2人が一緒にいると、ジェイムズ朝とヴィクトリア朝とが並列している (P.51)」事になる。
- 6) John Lucas, *The Literature of Change*, pp.180—1 (The Harvester Press, 1980).
- 7) 例えば p.163には、「テスの一時的な肉体上の疫病は、精神上の収穫物となっていた」とある。
- 8) *Tess*, p.131.
- 9) A Letter to Millicent Fawcett, Apr. 14, 1892, *The Collected Letters of Thomas*

井 伊

Hardy, vol.1, ed. Richard Little Purdy and Michael Millgate, p. 262 (Oxford Univ. Press, 1978) 参照。ここでハーディは大衆に現実を知らしめ、彼らの意識を変える決意を述べている。

- 10) F. B. Pinion, *A Hardy Companion*, p. 178 (Macmillan, 1978) にも、1904年におけるウィリアム・アーチャーとの対話の中で、ハーディが当時の文学の楽観主義について、「根底において臆病で不誠実」と言ったとある。
- 11) *loc. cit.*
- 12) Hardy, "In Tenebris II" *The Complete Poems*, p.168, ed. James Gibson, (Macmillan, 1976).
- 13) *Tess*, p.56.
- 14) A Letter to George Douglas, Dec. 30, 1891, *op. cit.*, p.249.
- 15) *Tess*, pp.120—1.
- 16) 運命とて同様である。「ハーディにとっては」「運命は（人間に対して一引用者）中立ないし無関心であった」Pinion, *op. cit.*, p.169.
- 17) Penny Boumelha, *Thomas Hardy and Women; Sexual Ideology and Narrative Form* (The Harvester Press, 1982) の p.130 にも同趣旨の指摘がある。また、George Wotton, *Thomas Hardy; towards a Materialist Criticism* (Gill and Macmillan, 1985) pp. 80-1 に、ハーディ文学の作中人物における三通りの物の見方が出ている。本文で述べた見方はその一つで、ウォットンの言によれば、主として 'most characteristic of the intellectual male characters' であるという。
- 18) Wotton, *op. cit.*, p.48.
- 19) Boumelha, *op. cit.*, pp. 63-97, chap. 4, 'Women and the New Fiction 1880—1900' 参照。
- 20) Roy Morrell, *Thomas Hardy; the Will and the Way*, p.100, (Univ. of Malaya Press, 1965).
- 21) *Tess*, p.324.
- 22) Lucas, *op. cit.*, p.176.
- 23) *Tess*, p.388.
- 24) Wotton, *op. cit.*, chap.9-10 参照。
- 25) Morrell, *op. cit.*, Foreword, xi.